

テーマ

# とやまの文化力を高める

## 第10回 立山倶楽部会議報告

平成16年9月29日(水)



(財)富山県ひとづくり財団



I

「立山倶楽部」

会議概要

# 目次

## I 「立山倶楽部」会議概要

日 程	1
参加者	2
写 真	4

## II 「立山倶楽部」会議内容

開会あいさつ	中沖 豊	5
趣旨説明	木村尚三郎	6
話題提供	吉田 忠裕	7
各参加者より	金田 章裕	11
	佐藤 陽子	13
意見交換		15

日程

平成 16 年 9 月 29 日 (水)

場所

富山全日空ホテル ASUKA

テーマ

「とやまの文化力を高める」

### 「立山倶楽部」会議開催の趣旨

国際的に活躍されている方々から、未来への洞察、世界の潮流、人間のあり方などについて、自由かつ率直に意見交換していただくための交流の場として、平成 6 年から「立山倶楽部」会議を開催している。

この会議の意見交換内容から、時代を先取りする見方・考え方を県政の創造的な施策に反映させるとともに、グローバルな視点から未来を考える人材の育成に資する。加えて、参加者に「とやまファン倶楽部」の会員となっただき、全国から富山を応援していただく。

# 参加者



代表世話人

木村 尚三郎

東京大学 名誉教授



金田 章裕

京都大学 理事・副学長



佐藤 陽子

バイオリニスト・声楽家



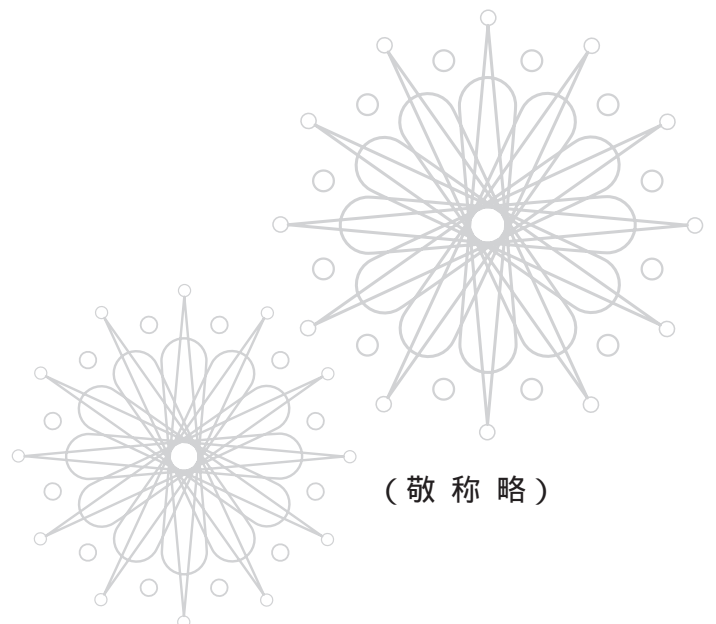
## 吉 田 忠 裕

YKK(株) 代表取締役会長兼社長



## 中 沖 豊

(財)富山県ひとづくり財団 理事長



(敬称略)

# *Photograph*





Ⅱ

「立山倶楽部」

会議内容



# 開会あいさつ

## 中 沖 豊

(財)富山県ひとづくり財団 理事長



中沖理事長

立山連峰がもう少し鮮やかに晴れてくるとよかったです。今日は皆様方をお迎えいたしまして、いろいろとご指導をいただくことになり、心からお礼を申し上げたいと思っております。また、木村先生はじめ、皆様方には大変ご多忙の中をご出席いただきまして、心からお礼を申し上げる次第であります。

この「立山倶楽部」会議では、平成6年に第1回会議を開催いたしまして以来、今日でちょうど10回目を迎えました。木村先生をはじめ皆様方にご尽力いただきまして、この会議はますます充実してきたと思っております。

また、皆様方からは、富山県発展のための大変貴重でユニークなご提言を大変多くいただいておりますが、改めて心からお礼を申し上げたいと存じます。

さて、富山県は、立山連峰や、秘境黒部峡谷などの世界的な山岳景観、それから蜃気楼が見られる不思議の海富山湾、そして世界に誇る名水など、美しく豊かな自然に恵まれております。まさに「水と緑の王国」ということが言えると思っております。また、全国トップレベルの芸術文化施設や、世界遺産の合掌集落などがある芸術文化のふるさとでもあります。

このような恵まれた環境の下に、本県では1983年

以来、富山県国際アマチュア演劇祭、世界こども演劇祭など多くの国際演劇が開催されるようになりました。去る8月には、富山市、高岡市を会場にいたしまして、世界各国の子ども劇団が参加いたしましたアジア太平洋こども演劇祭が開催されました。また、利賀芸術公園におきましては、中国や韓国などの劇団が参加した第11回ベセト演劇祭が開催されています。今や富山県は、国際アマチュア演劇や、子ども演劇のメッカの一つになっていると思っております。

また、富山県の大島町絵本館におきましては、第7回アジア児童文学大会が開催されたところであります。こうした国際的なイベントを通じまして、この富山から国際色豊かな文化が世界に向けて発信されてきております。

21世紀は文化の時代とも言われておりますが、富山県としましては、今後とも、「富山県民文化条例」や「富山県民新世紀計画」などに基づきまして、文化の県づくりに積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

本日は「とやまの文化力を高める」がテーマとなっておりますが、国際経験豊富な皆様方に、大変幅広い見地から積極的にご議論いただきまして、これからの県づくりに反映させていきたいと存じております。どうか皆様方には忌憚のないご意見、ご提言をどうぞ積極的にいただきますように、お願い申し上げます。それではどうぞよろしく願います。

# 趣旨説明

## 木村尚三郎

東京大学 名誉教授



### 木村代表世話人

今、知事さんからお話がありましたように、これまで9回「立山倶楽部」をやってまいりました。知事さんを中心に、自由活発に、時には無遠慮に、いろいろ意見を出していただきまして、これからの富山を、日本の中の富山ということもありますし、あるいは世界の中の富山ということもあるわけですが、どういう姿にしていっていいだろうかということ、それぞれの見地からお話をさせていただくという趣旨でこれまでやってまいりました。

今回のテーマは「とやまの文化力を高める」となっております。これは、ご承知のように、今全世界的に技術文明が大勢においては成熟してしましまして、全身に大きな驚きとか、あるいは喜びとか幸せを与えてくれるような、そういう大きな技術の進展が見られないということがあって、これが世界的に景気の低迷というのを引き起こしていると思います。こういう時に人間は必ず動くわけで、先がどうなるかよく分からない時は、居ても立ってもいられない気持ちになり、動き出しているわけです。

今、全世界的に7億弱の人が外国旅行に毎年出ております。この数字が2010年には10億、2020年には16億に伸びるでしょう。21世紀最大の産業は旅産業だと、もう一つのWTO、世界観光機関が予測し

ています。本当はTourism産業とWTOは言っているわけですが、日本語のいい言葉がなく、観光というと少し古いイメージになりますから、私は旅産業と言っております。

科学技術あるいは経済的なことは今グローバルに進んでいくわけですが、それだけに土地ごとにしかない生きる知恵とか楽しさ、土地ごとのいい生き方が観光の目的になってまいります。これが文化というものだろうと思うんです。経済のグローバリズムが進めば進むほど逆に、文化がその土地ごとに、生きがいとか生きる自信とか生きる誇りとしても大事になってくる。生き方としては「グローバルよさよなら、ローカルよこんにちは」というのがこれからの時代かなと思います。グローバリズムが進展していけばいだけ逆にそういう面も出てくるということです。まさに土地ごとのいい生き方が文化ですので、どの国についても、どの地域についても文化の有りが問われてくる。工業製品にしても、そのデザインとかあるいは作り方のノウハウとか、土地ごとの、あるいは国ごとの特色が、そこに色濃く反映されてくるわけです。農業におきましては日本の緻密な農業のやり方というのは、欧米人の目から見ると、agricultureではなくて、gardeningだというわけですが、これもやはり日本の文化の表れだと思います。そのような文化が、これからは経済や外交、ありとあらゆる面で問われてくる時代ではないでしょうか。

最近日本の農産物は海外によく売れるようになりまして、特に果物は、種類は豊富だし、味はいいし、形とか色がきれいだということで、大変評判になってまいりました。それからつい8月に、フランスの最高級誌「ルモンド」が一面を使いまして、クロワッサンの特集をやってまいりました。クロワッサンがウィーンで誕生してから今年で321年になる。もともとはウィーンから始まったんですが、それが1770年にマリー・アントワネットがフランスにお嫁にやって来たときに、クロワッサンの元のキプフェルが初めてパリに来て、「三日月パン」、つまりクロワッサンとして大いに発展した。ところが、「今やフランスのクロワッサンは東京経由でウィーンに帰りつつある」という特集なんです。東京へ来たというのは、フィリップ・ピゴというフランス人が、東京の青山

## 話題提供



通りにクロワッサン専門店を今から40年近く前に開店して、そこで種類が増え、質も向上した。特にツナマヨ入りというのが爆発的人気で、今や新世代クロワッサンがウィーンに帰って、専門店ができて、それが圧勝している。つまり日本の菓子パンづくりの技術が今、世界最高レベルになってきています。

菓子パンに限らず、昨年フランスのリヨンで行われましたチョコレート菓子のコンクールでも、1位はフランスでしたが、2位は日本で3位がベルギー。よくバレンタインデーにプレゼントする1粒何百円というベルギーのチョコより、日本のチョコの方がおいしくなってきたという現実があります。「失われた10年」といいますが、この10年の間に日本の美的なものが、大変伸びたんです。もちろん音楽も芸術も、農産物もそうですし、もう一つはスポーツで、もう一つはボランティア活動、これは明治以降初めて日本の若者が発揮している情熱ではないかと思いますが、そのようなことも私達の昔から美しいものを愛してきた文化の所産です。

まさに21世紀はそういった文化の力が問われ、それが技術や経済にこれから多く反映されてくる。これからとやまの文化力を世界に向けていかに高めていくかが大きな課題になるということで、こういうテーマを設定させていただきました。今日お集まりの方は、富山県ゆかりの方々、あるいはゆかりどころか富山県そのものという方々でありまして、ゆっくり話していただければ幸いです。

最初吉田さんの方から、20分ぐらいお話をいただいて、その後、金田先生、佐藤さんにそれぞれ、吉田さんの話を聞かれてのご感想とか、あるいは全く無関係でも結構ですので、今日のテーマに沿ってお話いただければと思っております。ではお願いします。

### 吉田 忠裕

YKK㈱ 代表取締役会長兼社長



吉田

先程知事さんからお話がありましたとおり、もう10回目ということで、大変多くの蓄積、あるいは功績があったこの会だと思っておりますが、大変大きな節目の会にご招待いただきまして、心から感謝をいたします。また今回のテーマを見ますと、中沖知事6期24年の総括というテーマにふさわしいと感じました。

かつては、文化的でないと言われがちな富山県だったと思いますが、知事がリーダーシップをとられて、県がこれまで文化力を高める施策を本当に積極的に行っていらっしゃるって、先程もいくつかイベントのご紹介がありましたし、富山県民文化条例や、文化計画といったようなものを策定されて、かなり文化度、文化力というのは高まったと認識しております。けれども、この時期にまたこのテーマを取り上げられたというのは、これから激しく動く時代の中で、もっと成果があがるようにするにはどうしたらいいかという思いが込められているんだろうと感じました。

冒頭から少し脱線するような話で恐縮なんですが、先日、私が金沢の知人に会った時に、金沢の寿司屋の話になったんです。「金沢の寿司屋は素晴らしい雰囲気とサービスがあって、本当にいいですね」と言ったら、金沢の人は、「いやいや、富山もなかなかいい

いよ。特に回転寿司はすごい」と。これはイメージなのかもしれませんが、味覚の伝統や、もてなしの作法という文化の面では、どうしても金沢に軍配が上がる。しかし一方で製造技術やシステムの面で、回転寿司のようなものを作らせたなら、富山に勝るものはないという、これはむしろ富山の文明に属するかな、と。私は決して卑下するわけではなく、ある意味では富山の特徴を非常によく捉えてくださっている、と誇らしげにその話を聞きました。文化と文明という、非常に身近で面白い例と感じて、笑いあった次第です。

文化力というテーマについて、富山県をもう一度いろいろ確認してみなければいけないと思って、歴史を振り返ってみると、今は太平洋側がむしろ表になっておりますが、かつて遣隋使時代から江戸時代の初期までというのは、大陸文化の受け入れ口の一つであった富山県でしたし、また江戸時代には官民一体となって、異文化を積極的に受け入れて、実学を育ててきた富山県ですし、近代ではその実学の伝統を引き継いで、高水準の製造業を擁するようになった富山県ですし、それから民力度でも国内トップクラスにある富山県、という状態だと思います。

改めて全国一位の指標を見てみると、勤労者世帯の1ヶ月あたりの実収入や消費支出、持ち家比率、住宅延面積、道路整備率、老人クラブ加入率と、かなり一位がずらっと並んでいて、住まいや教育ということに関しては、以前からも言われておりますが、大変高い指標が続いておりますし、数字で見ると限りにおいては、民力度という意味で、富山県は本当に国内トップクラスになっていると思うんです。

ただ、何かが足りないと感じているのか、あるいはもっと違う文化力をつけなきゃいけないのか、ということがこのテーマからは読み取れます。文化というのは精神性や、心、感性といったものに関わるもので、かたや文明というと、技術、物質性ということなので、文明というのは、国とか民族とか人とかtransferできるんですが、文化というのはその国とかその土地の自然環境や風土があり、それから民族、人、歴史によって培われた固有のものがある。今回のテーマは、その固有の文化力をどう高めるかということなんだろうと思います。テーマの趣旨の中に「ものづくりの力」とか、「観光資源」というキ

ーワードが出てきましたし、それから文化をどう発信するかという発信力に対する課題も出てきましたし、それを国際的な視点、それから今ほど木村先生がお話しになった旅産業、Tourism産業を意識しながらということだと思っています。

「とやまの文化力を高める」ということなので、文化力の対象になる文化という範囲を分けると、純粋にかつてのイメージで思っていた文化と、文明的な文化がある。富山県は文明的な文化というのは結構強いんじゃないかと思っていて、また知事が一生懸命進めてこられた県政の結果として、いわゆる純粋な文化も強くなっていると思っております。むしろ、これらの個々の文化に対して、どの程度のところまでいけば満足なのかというプランがあって、そのプランが達成できたかできないかということで、検証していくというような手法もある程度欲しい。そうでないと、いつまでたっても終わりのないテーマだと思います。

それから今回感じたのは趣旨の中にも書いてある発信力です。情報発信力が富山県の場合には弱いというか、これはニワトリか卵かなんですが、たくさん発信しても感じてもらえないものであれば、もしかすると中身が適切でないかもしれない、あるいは発信パワーが十分でないかもしれない、発信する相手が合っていないのかもしれない、といろんなことがあるので、その辺はかなり戦略的に緻密に組み立てて進んでいかなければならないんじゃないかと思えます。ただ、それは誰がやるのかという問題もありますし、それから細かい組み立ての集積で、一生懸命仕事はしているが、本当に県民が喜ぶような結果が見えるかということ、なかなか難しい。

もう一つは非常に長期の計画です。もちろん富山にも長期計画というのはあると思っておりますが、ヨーロッパなどと、たとえば大きなプロジェクト、あるいは小さな街の教会にしても市役所にしても、何十年、あるいは百年単位の時間をかけながら作っていく。街のマスタープランがかなりきちっとつくられていて、やがてはこういうふうになっていくということに対して、行政も政治家も一般市民も同じ情報を持って動いていき、それを皆誇りに思っている。

私も黒部の街づくりということに関わりまして、まずどうやって黒部の人達、市民一人ひとりから行動してもらおうかということで動きました。行動して

もらうには、やりたいことをやらしてもらわないと、なかなか押し付けでは動いてもらえないので、いろいろな提案をいただき、よさそうな提案に肉付けをさせてもらいながら、「この指止まれ」という感じで集まってもらい、ボランティアとして行動してもらった。そこまではいいんですが、それから先、「さあ、この街をどういうふうにしていくんだ」あるいは「何をどういうマスタープランの中で作っていくんだ」という話になると、なかなかついていけないということがわかってきた。一つには勉強が足りない。もう一つには「お上にお任せ」がずっと続いていたので、急にそんなことを問われてもわからない。という状況が起こって、今もう一度何か目に見える形で、みんなの琴線に触れるものを、きちっと作りあげなければいけない。皆が納得するものをつくりあげるとするのは、大変な作業なのかもしれないですが、そういうものをつくりあげていかなければならないと思っています。

そういう中で非常に面白いのは、何かしようとする、ベンチマークをしたり、いろんなところが何をやっているか、いい話を参考にしたり、という話がでてきて、皆さん結構勉強するんです。木村先生にも随分来ていただいて、ご講演をお願いして、いろいろな方にもご指導いただいたりして、そういうプロセスを今一生懸命している最中で、これが次にどうつながっていくのかなとは思っているんですが、すぐに10年が経ってしまう。10年経つと、「ああ、面白かった」でその世代の人が終わっちゃって、また次の世代に何かしなきゃいけないのか、という話になるので、これはかなり若い人達のところから始めておかないと大変で、その世代間をどう繋ぐのかということが、さっきの長期ビジョンの話にもつながるんです。大変苦労しながらも、そういう現場に直接入らせていただいたために、市民感情や、市民の行動パターンといったものがよく分かったんですが、具体的にどう進めていくかというのは大変だと感じています。知らないでやっている時の方が楽でしたが、知ってやり始めるというステージにかかってきていますので、大変だと思いつつもかなりクリアな目標設定をしていかなければいけないなと思っています。

ちょっと話が横へそれていくんですが、もう一つ。

YKKという会社の経営をしているんですが、1990年代に入ってからずいぶんと変わってきて、いわゆる冷戦が終結し、ITがよいよ実際のツールとして使えるようになってIT時代が到来した。この二つが重なってどういう問題が起こったかというと、たとえばアパレル業界でも今まで消費国に近い所で作られていたものが、だんだんと消費国から離れていても同じものを作ることができるのならば、それでよくなってきたということで、冷戦が終結した途端に、かつての社会主義国で、いろいろな生産活動が行われる。そこが当然安いわけですから、どんどん生産の現場がシフトしていく。非常に多くの場所で同じ仕様の生産活動が起こるので、ファスナーの話で言えば、かなりのところへ供給しなければいけない。そういう需要のあるところへ行くのが我々の仕事なので、したがって現在は66カ国で協定を作っているんですが、そこへ中国が大きな影響を与えている。実は、今週は世界中から100人ちょっと集まって黒部で技術者会議をしているんですが、今日、アメリカのアパレルのコンサルタントに来てもらって、アメリカから見た世界のソーシング、調達がどうなるのかという話を聞いていたんですが、今は本当に読めないけれど、確実に中国は強く力を備えていく。したがって、対中国の中で我々はどう商売するかということと、中国以外のところをどういうふうに育てていくかということと、もう時代は終わって衰退していくような生産国、北米、北ヨーロッパ、日本というところをどうしていくか、と今まで経験したことの無いいくつかの問題を同時に抱えまして、しかしそれでも地球規模で言えば、伸びている需要に対してどう対応するか。その対応を、戦略的には東京で地球規模のことを打ち合わせしますが、製造技術とか商品ということになりますと、この富山でかなり行っていかなければならない。これから何年がかりで新しい時代を乗り越えていかなければいけないという人がまず富山にいなればいけない。かなり現地との分担もありますので、たとえば中国との分担をどうするか。YKKグループに今外国語が37カ国語必要なんです。ということは、37の価値観があると私は解釈しているので、その人達を満足させなければいけない。時には研修も行わなければいけない。そういう人達が納得するものというのを、

技術的なことだけというよりも、人間的にも、あるいはその人間が今日まで培ってきた社会環境を含めて、彼等を納得させなければいけない。これからのことを考えると、設備投資だけではなくて、人間の教育的な投資をしなければならない。

昨年未だに全社員に「中国語を勉強してください」と言いましたが、かつて英語を全部勉強するのは当たり前と言っていた時代に対して、今度は中国語を勉強してくださいという時代になってきた。37ヶ国がもっと増えるかもしれませんが、この2ヶ国語は日本語にプラスして基軸の外国語になる。どうも、言葉というツールはかなり重要なツールで、情報発信という先程の話に戻りますと、情報発信力をどうしていくのかということになると、その一つはもしかすると言葉ではないのかなと思っておりまして、すごく短絡的な提案で言えば、やはり富山県民は何ヶ国語かを話せるようにならなければならない。

中国に行くとき日本語が非常にうまい人がたくさんいるんです。「君はどこで日本語を勉強したんだ」「いや、上海から一步も出ていません。自分で勉強しました」「ただどまだ若いのに学校で勉強したのか」「いや自分で勉強しました」それこそ一日10時間必死になって勉強したと。我々に対しては日本語を勉強するんですが、ドイツの企業に対してはドイツ語を勉強しますし、英語の企業に対しては英語を勉強しますということで、必死になって勉強するわけです。ですからそれによって、彼等の世界へのアクセス、彼等自身の国際化が急激に進む。そのことがいいのか悪いのかというのはまた別の話にして、我々は富山県が本当に国際化、あるいは国際社会に情報発信をするとすると、こういうツールも無視できないと思っております。

今経営を担当するものとすれば、大変なスピードでめまぐるしく変わっていく中で、いわゆる文化的なものも非常に大事だと思うんですが、文明的なものも進めていければいいと思います。この先にどういう富山県と世界とのつながり、富山県の日本の中での位置づけ、といったものがあるかということ、いろいろな企業や団体、個人の集まりの中で見えてくると思っておりますが、是非そういうことを、この時間の中で討論させていただければありがたいと思います。

木村 ありがとうございます。大変大事なお話を頂戴いたしました。

以前にアメリカのゴールドマン・サックス証券が2050年の世界を予測していて、経済大国1位は中国、国民総生産44兆ドルです。2位が今の1位のアメリカで35兆ドル、3位がインドの27兆ドル、4位が6兆ドルの日本、その下に同じく6兆ドルのブラジル、その下に5兆ドルのロシア。その下がイギリス、ドイツ、フランスの3兆ドル。そういう意味では2050年になると、アメリカよりもアジアが大事になってきて、これから英語と中国語というのは必須になりますね。

しかも9月15日からは団体観光ビザが、中国について一気に拡大されました。今までは北京市と広東省と上海だけだったんですが、遼寧省、山東省、天津市、江蘇省、浙江省が増えて、一挙に3億7,000万人になったんで、これからどっと来る可能性があるんです。それを考えると、今吉田さんのおっしゃった「中国語をこれから皆勉強しなさい」というのは本当に大事なことです。

2020年ぐらいにドルから元への転換をするんじゃないかとも言われています。もうすぐそこですね。しかも中国の熱気や意欲はすさまじいです。だから今若い人はどんどん中国の中で苦労させることが大事じゃないかと思うんです。少し底辺としてがんばって見ないと、国民感情みたいなものは分からない。私の東京大学の弟子に中国で不法就労して、下層民の生活をしてきたのがいて、この人の話を聞くと面白いんです。10年付き合っても、コンパやった、ぐらいじゃ友達になれないんですね。「朋友」になるというのは、たとえいかに小さい汚い家でも、家に呼んでくれて、ご馳走してくれることだと。しなきゃ10年経ったってだめ。

元サントリーの会長の佐治さんは、よその国に行くと、その国の人にとって一番という歌を現地語で歌った、と言っておられました。日本の「夕焼け小焼け」みたいなのを歌うと、みんな心開いて、感心するっていうんです。さすが商売人だと思いました。世界中の、そういう心をつかむ歌はこれから勉強する必要がありますね。

最初の話の回転寿司は、日本文化だと思っております。回る文化というのは日本に元々あって、回り舞

台は、18世紀に大阪の角座から始まって、それが江戸の中村座にすぐ飛び火して、それから世界中が回る舞台になったんで、日本が発信地です。それから江戸時代の大名が作った回遊式庭園も日本の形ですし、中華料理の回転テーブルも日本が中国に影響を及ぼしたんです。それから縦に回るとパチンコです(笑)。今おっしゃる回転寿司も全世界に広まっています。味よりも何よりも動いているのに関心がある。

非常に大事なお話をいただいて、ありがとうございました。今度は金田先生、人文地理、歴史がご専門で今はお忙しい京都大学の副学長をされておられる方です。どうぞよろしくをお願いします。

## 各参加者より

### 金田章裕

京都大学 理事・副学長



**金田** 今、吉田さんのお話の中で、金沢の寿司と富山の回転寿司という話があって、それで富山県の方は文明的な文化が強いんじゃないかという話とか、そういうことで笑って話し合える間柄になっている、これがいいんだということをおっしゃっておりまして、私はこの点に非常に感じるころがありました。また、グローバルな展開と地域に根差した文化、そういった点での対比を非常に興味深く拝聴していたんですが、それを聞きながら実は変な話を思い出してしまいました。

ヨーロッパのいわゆる大国の人は、お酒を飲んだ

りすると、お互いに何かボロクソに言っているんです。たとえばフランス人はドイツ人に「ソーセージを食いまくって一生懸命働いてどうするんだ」とか、そうするとドイツ人の方はフランス人に向かって「飯ばかり時間かけて何をしているんだ」とか、その手の話がひどいんです。しかしお互いに過去の歴史を踏まえて、相手を認めざるを得ない、ものすごいバックグラウンドがある。馬鹿にされているように見えるイタリアにしたって、ローマ帝国以来のヨーロッパ文化のバックグラウンドは全てそこにあるわけですから、そういったお互いのある種の成熟した関係、それがおそらく文化とインターナショナルのベースなんだろうと思うんです。

私がしばらくケンブリッジにいた時に、おもしろい情景にぶつかりました。フランスは世界各地に文化担当の施設を作っていますが、そのうちの一つがケンブリッジにもあります。その館長が交代した時の歓迎会が、ケンブリッジのエマヌエル・カレッジの中でありまして、エマヌエル・カレッジの学長と、新しい館長が挨拶をして握手をしているんです。握手しながら何を言っているのかというと、たまたまその少し前にユーロトンネルというイギリスとフランスとの間のトンネルの中で、トラックが火災を起こして、非常に大きな事故になったことがあり、そのことを巡って、フランスの新しい館長の方が、「トンネルの中でちゃんと火を消せるようにしとけよな」とか言っているんです。エマヌエル・カレッジの学長の方は「燃えるようなトラック、トンネルに入れるなよな」とか言っているんです。どうも初対面らしいんですが、初対面で話をしながらそういうことをやっている。この関係というのは非常に面白いと思ひまして、こういうのが文化が成熟した時の一つの状況を示しているんだろうと思うんです。実は吉田さんのお話を聞きながら、そういう話を思い出していました。

文化というのはその地域に根差したもので、土地ごとに、国ごとに違うというのはその通りだと思いますし、最近のグローバリゼーションの中で、一番の大きな対極であり、かつグローバリゼーションの中で、最も重要な役割を占めるのが、おそらく地域や文化だと思います。

私は専門が人文地理学の中の歴史地理学という分

野であるということもあり、景観ということに大変強い関心を持っております。特に、中沖知事の主導で田園空間整備事業が富山県にも導入されまして、私も委員として関わらせていただいたんですが、景観というのが文化の重要な一つの要素だと思うんです。景観というのはその地域の自然環境と、環境の歴史的な展開、もちろん経済も社会も何もかもひっくるめた形で表現している一つのスタイルなんです。その景観をどのように考えるのかというのが、その文化を見る時の非常に重要な指標になると思うんです。

先程例に出しましたヨーロッパでもそれぞれの土地ごとにそれぞれの文化を持っているわけです。日本語の「景観」と、英語の「landscape」と、ドイツ語の「Landschaft」とは実は3つ全然意味が違ましてややこしいんですが、Landというのはドイツの非常に特色ある地域の政治・経済・文化・自然環境の単位なんです。Landschaftというとその土地性みたいなものを全体として表現するような概念です。それが英語のlandscapeになるとちょっと違ってくるというやっかいなことがありまして、そのあたりが議論の混乱するところですが、そういうものが一体となって、出来上がっているのが景観だという認識をしております。

そうすると好ましい景観、その地域においてこれが好ましいと思われて、いい方に展開してきた景観が、長い間の「ろ過」を経て出来上がっていくというのが現状の景観で、歴史的ある文化的な景観だという捉え方ができると思うんです。そうするとそれがその地域にとって一番重要なことで、それを捨てちゃうと、一番有利な点を捨ててしまうということになると思うんです。ですから景観は大変大事で、たとえばヨーロッパの国々の景観を大事にしているところでは、好ましい景観をよりちゃんとしてつくっていくような努力を大変盛んにしているんです。

イギリスでは、ビクトリア時代よりも現在のほうがビクトリアン・タウンやビクトリアン・ビレッジがたくさんある、と口の悪い人はそういう言い方をするんですが、これはその通りなんです。つまりイギリスを代表する景観というのは、一つはビクトリア朝時代にあり、そういうものを望ましいものとして再生産していくし、ちょっと醜いものがあれば、

それを建て直していくということが行われるわけです。その背景には、建物の中身は個人のものだが、外見は共有のものであるという、非常に重要な考え方があって、これは是非とも考えてもらわなければならないと思うんです。

そういった点で、田園空間整備事業で、具体的にはたとえば砺波の散村地域といった、素晴らしい景観をいかに保全するかということを議論してきたわけですが、その中の議論を踏まえまして、富山県で景観条例を作っていただきました。この景観条例は日本の景観条例の中でも最も優れた条例だと私は思っています。何が素晴らしいのかというと、地域協定というものが入っております。つまり農村の「区」ですから、江戸時代の村ぐらいの、せいぜい何十軒という小さな単位なんです。その単位ごとに景観の保存のためのいろんな協定を結んだら、それを県が認知をしてサポートをしましょうというシステムなんです。

これは大変重要なことです。何故重要なのかというと、二つありまして、一つは景観というのは、一人が勝手に変なことをするとそれで全面的に台無しになっちゃうんです。「美しい砺波散村の中に…」という工場のパンフレットを作っているところがあるんですが、周りは砺波散村でも、そこにある工場は全然違うものなんです。これは景観の保全の考え方から言うと、とんでもないことになってしまいます。だからいろいろ方策を考えないといけないんですが、景観が共有のものであり、全体で考えるべきものであるということを考えていただく場として、地域協定を議論する、ということが非常に重要であるということなんです。

もう一つ、そこで自分達があまり自覚なしに住んできたという部分もあるんですが、今まで守ってきた、地域の歴史の結晶としての景観が持つ意味はどういうものかということを考えていただく。この二つが景観条例のもつ非常に重要な意味なんです。富山県の景観条例は、それを定着させる努力をこれからもっとやらないといけないということはあるんですが、その点において大変優れたものだと思っております。

たとえばヨーロッパ社会などでは、国によって違いはあるんですが、これが非常にうまく機能してい



ます。どこへ行っても、この地域はこういう特色ある景観があるということを強く印象づけられ、もちろんその地域の住民もそれを誇りに思って、そしてそこに自分の意識がまた回帰するような形で、インターナショナル、あるいはグローバルな文明とローカルな文化というものとの交流ないし双方向の選流が行われるというのが重要な点だろうと思っています。

そういう点から言いましても、たとえば砺波散村をはじめとする富山県の住環境や、特に農村地域などの住環境というのは、世界的に見ても非常に優れた高い質をもったものだと思っています。これは確かに誇るものであり、そういうことも含めて人々に理解をしていただいて、共有のものとして大切にしてい、更にそれを好ましい方向に展開していく。醜いものがあれば、たとえば看板などはちょっと下げていただくとか、いろんな方策を考えることが必要だろうということです。そういった、全体の景観を考えるということをこれからもっと続けられ、そしてその高いレベルのものをよりよく展開させるということを考えれば、富山県の持っているような潜在能力、地域に根差したものがもっと有効に、有意義な形で展開するのではないかと思います。そんなことを吉田さんの話や知事の話の伺いながら考えておりました。

木村

ありがとうございました。美しい富山県は大事ですね。知事さんがずっと努力された新幹線も、県の条例で沿線に看板を一切立てさせない、というふうにすると美しい富山県になりますね。県民の共感も得られるんじゃないかと思うんです。工場とか旅館は、借景は考えるんだけど、自分がどんなに醜い姿をしているかというのは考えない。あれは本当に問題です。

富山ほど「今日は立山が見えた」「見えない」ということを話題に出す県はありません。他の県では聞かないです。まさに自然を愛しておられるわけだから、美しい自然を壊すということは絶対いけないことです。自然に対する尊敬・畏敬の念というのは富山県が一番強いんじゃないですか。美しい富山、これはこれから一番大事な文化力の一つだということですね。

お待たせしました、佐藤陽子さん。富山県とはどのようなご関係なんですか。

## 佐藤 陽子

バイオリニスト・声楽家



佐藤

最初は、私の亡き主人が高岡でいろいろな製作をするというのがご縁でして、富山市・高岡市のお仕事に私もほとんど常について参りましたので、演奏させていただくチャンスも増えました。万葉集朗唱の会ももう15回目になりますが、そのうちの12回ぐらいは私も参加させていただいております。最初の頃のような感動はなかなか続けるというのは難しいんですが、常にその時期に舞台上に立てるといふことの喜びの方が非常に強くて、年々愛着は深まっております。そしてこれも池田満寿夫の方の関係が始まりですが、富山県出身の瀧口修造さんや堀田善衛さんともいろいろな交際がございましたので、そんなところから親しみや愛着が増してきました、最低年に2回ぐらいは来させていただいて、つくづくよさというものを感じさせていただいております。

ただ、富山県は美しいとは思いますが、他にも自分の県が美しいんだと言っているところはたくさんありまして、それなりの努力はしていると思うんです。私の故郷であります福島も「うつくしま、ふくしま」なんて言っていますが、経済的開発と美しい環境を保つ、あるいは更に美しくするのはなかなか共存しにくいところがありまして、これは日本が抱えている問題のような気がするんです。

ヨーロッパは、木と紙の文化と石の文化との違いということもありまして、頑丈で、そして半永久的にがっちりと造られていますし、石畳というのはやはり田舎道と違って、コンクリートにする必要がなく造られています。日本は、もろさが美しさみたいなどころがあって、それをうまく保って、この近代発展のために共存させるにはいろんな難しさがあるんですね。

先程、金田先生から看板の話もありましたが、看板がいけないというより、看板の作り方がよくないんです。名画に匹敵するようなどは言いませんが、非常にセンスのいい看板というのも有り得ると思うんです。そういうものは、いったい何の看板が分からないというところが一番の難点なんでしょうけど、逆に「何の看板だろう？」とみんなに思わせて注目を引くような、そういう看板のあり方というのもあると思うんです。コマースのキャッチコピーでも、あれいったい何のコマースなんだろうと、何度か考えさせられるものがありましたよ。

それから思いましたのは、確かに歌というのは、伝統や血の違いというものを超えて人を強く結び付けられるということです。その国の言葉で歌うと本当に打ち解けるといのは事実です。そのいい例が、イタリアで私達が映画を作りました時に、衣装係と私が衝突していたんです。でも、スタッフが集まったパーティーで、私がイタリアの、ブッチーニやヴェルディのアリアを2～3曲歌うと、それから彼女の目付きが変わっちゃいました。こんなにイタリアのオペラを理解してくれているのかということで、何でも話し合えるようになって、とてもうまく付き合えるようになりました。池田満寿夫の方はイタリア語の歌は知らなかったんですが、彼の好きな歌の中で「骸骨の歌」という非常に悲しい歌があって、シチリアの方の歌らしいんですが、それを日本語で歌ったら、それもまたとても皆さん感動して。イタリア語の歌詞は知らないんですが、違う言葉で歌っても、メロディだけでも通い合うんだな、と。それが音楽の強さ、素晴らしさだと思いますね。

それからもう一つ、日本では公共の場、たとえば美術館とか音楽会場というのはみんな襟を正しちゃって、自分達の遊び場という認識が薄いような、欠けているような気がするんです。ただ鑑賞するとい

う意識が強すぎるように私は感じてしまうんです。ところが向こうでは、これは市民のものだ、私達の遊び場なんだ、私達の社交の場なんだという認識がとて強くて、音楽会で音楽を聴くだけではなくて、「そこで誰それと会うんだ、そこでしか会わない人達かもしれないけれど会うんだ」、そして休憩時間に挨拶したり、「今日の演奏会はああだね、こうだね」って話に花を咲かせたりする。美術館では、学校ぐるみで、絵の具を持って来て、子供達も一緒に模写してみたり、何したっていいような空間に作り上げちゃうのが素晴らしいと思うし、そういう場所が日本にも欲しいという気がしています。日本でも学校ぐるみで来ますが、ただ先生が説明して、それを聞いているだけで、それ以上の遊びがない。

たとえばこれも私達二人で行ったんですが、フランスのグルノーブルの、特に有名な絵があるというところではありませんが、美術館としてはとても素敵な建物でいい所なんです。そこで取材をしたんですが、二人がまだ結婚式をしていないって聞いたから「じゃあ、明日この美術館で結婚式をしましょう」と市長も館長も言ってくれて、「じゃあそのお返しに私が演奏しましょう」と言って、そこでちょっとしたミニコンサートと結婚式とを聞いて、すごい思い出になっちゃいました。それと同じようなことがポーランドでもあったんですが、そういう市民の場としての使い方、温かさのようなものがあると違うんじゃないかと思いました。

もう一つ、スペインのアルハンブラ宮殿の取材をした時、噴水のきれいな庭で、許可を得て私がハバナを1曲弾いたんですが、歓声もざわめきもないんです。観光客の皆さんも知らん顔して通り過ぎて行って、どっちの邪魔もしない環境を作ってください。ところがホテルに戻ったら、「素晴らしいかった。さっきあそこで聴いていたんですよ」という方が何人もいらした。こっそりと聞いてくれたんです。そういうのはなかなか日本では考えられない状況じゃないかな、そういうのが一つの文化じゃないかと思うんですね。

私の主観であり、池田満寿夫ともずいぶん話し合ったんですが、文化と文明の違いというのは、いろいろな解釈があるでしょうけど、文化というのはかなり個人的なものなんです。伝統と個人的なもの、

だから一人で作り上げることも可能なもの。だけど文明というのは一人では絶対できないもので、そして非常に生活に密着しているもの。文化はもしかしたら密着していないかもしれないと思うんです。だから両方を求めようとすると少し無理があるかもしれない。でも間接的な関連はありますから、常に求めているべきものかもしれない。特に富山県は歴史があり、そして環境が素晴らしいところですから、そしていろんなデータから見ても、今日本一住みやすい県になっているんですから。

**木村** ありがとうございます。どんどん公共的なものを使って、美術館を結婚式場にしてしまうと、音楽ホールで観客呼んできて、パンパカパーンってみんなと一緒にその人の結婚式を祝うとか。

佐藤さんのいい音とか、あるいはいい香りとか、金田さんがおっしゃった景観もありますし、あるいはいい皮膚感覚の問題もあるし、五感に美しいって素晴らしいことですね。

**佐藤** 私がとても感心したのは、ドイツのマイセンの職人達は街中に住まわせないで、自然の素晴らしいところを生活のベースにさせて、いろんなアイデアや、色彩感覚を常に育てていけるように考えているということです。そういうものは物を作る人間にとって大変必要なことですよ。

**木村** 南フランスにサン・ポール・ド・ヴァンスというところがあって、ニース空港から北に車で20分くらい行った山の中なんです。山の景色が非常にいい所なんです。人口2,900人の村なんです。1920年代に、美しいというのを画家達が発見して、モジリアーニとかシニャックとか、みんな上がってきて絵を描いたんだけど、宿賃がないからそこに絵を置いてきたわけです。それが今財産になって、そのレストランに集まってきて、それが見たくてまたそろそろやって来るわけです。山の村は画廊やアトリエがひしめいていまして、お土産屋もあるんだけど、画廊ばかりで、景色はいいけど他に何にもないんです。それがまた有名になって世界中から人が来るんです。そういうところに人

を集めるというのはいいことですよ。

**佐藤** 世界的にそういうしきたりっていうのはなくなってきましたね。「そうか、絵を描けるのか。じゃあ、宿代とか食費はかまわないから、その絵を置いていってくればいから」という宿ももうなくなりましたもの。昔は日本でもあったのに。

## 意見交換

**木村** もう一巡しましょうか。

**吉田** 私、6月にストックホルムに行ったんです。実はlandscapeを見に行っただけですが、一番美しいlandscapeはどこだということで、そして大変大きな森の中に、「森の火葬場」というところがあるんです。ちゃんと火葬場もお墓もあるんだけど、非常にうまく作られていて、みんな日曜日にはピクニックに行って、遊んでいるわけです。墓石はそんなに大きいわけじゃないからあまり気にならないし、墓石の前に花を植えるので、お花畑みたいになって、なくなるとまた新しい株を植えて。それで感心して、もう少し周りを見ると、やはり寒い雪国なんです。人々が本当にいい生活をエンジョイしている。

富山って、宗教の影響を受けたいいものがたくさんあるじゃないですか。だから墓だけの話じゃないですが、歴史をひっくり返すようなことではなく、なおかつ新しいものを取り入れて、いろいろなことを考えていかなきゃいけないだろうと、そういう分野もあるんじゃないかと思ったりするんです。

それから、看板のお話がありましたが、富山に来る人や住んでいる人に、何が一番美しいかって聞いたら、自然が美しいと言う。自然が美しいってことは、自然以外のものがあれば美しくないということなので、じゃあ何もつけないのかということ、そうもいかない。その時に、看板をもっと美しく作ればいいのか、建物を作る時の建築構造をどうするかとか

いうことになっていくんだと思うんです。何も作らない自然が一番美しいんだと言っていては終わってしまうので、もっと富山のイメージらしい作り方をどうするのかということを考えなくては行けない。これは、実はサッシメーカー、建材メーカーがいけないとよく言われて、供給する側も考えなきゃいけないんですが、みんなで考えて、「この街をこういうカラーにしようよ」「こういう美しさを作り上げていこうよ」ということをしなきゃいけないんじゃないでしょうか。

それから水が非常に重要な県であるにもかかわらず、実は水の使い方や、水の活用の仕方という点では、国際的に「水と言ったら富山の」と言えるものがあるのかどうなのか。私の知る限りでは国際的に有名になったものはあまりないですね。

**佐藤** 日本の水はボルビックやエピアンのように有名になっているのはどれ一つないと思いますよ。日本の水はいい水だというのはわかっているけど。

**吉田** そうですね。だから、こんなに美しい水が大量にあるということの幸せを、もうちょっと何か使う方法があるんじゃないかと思うんです。

それから、住宅のお話もありましたが、スペースは広いのはわかった、持ち家率が高いのはわかった。けどわかってないのは、自分が実際に富山に住んでないためにわかってないのかもしれないんですが、いわゆる富山の住宅の中のライフスタイルがよく分からない。家の中がイメージできないんです。最近建っている、いわゆるハウスメーカーが作っているような家は中の空間がイメージできるんですが、昔からある、非常に建坪が大きい、いわゆる富山の家の中のイメージが湧かないんです。

**木村** 使っていない部屋もあるようですね。

**吉田** 昔のまま残っていて、意外とその中の一部だけ使って、あとは持て余しているんじゃないかと思っているんで、そうだとすると、若い人達がこれを維持していくのも大変だなと思います。

だから、大きい家に住むことの豊かさが、若い世代の中で感じられるような、誇りに思うようなものがあるのかどうか。ミスマッチというか、片方では家は大きい、確かに平均の延べ床面積は大きい、けどそれは古い家が大きいんであって、新しい家が大きいのかどうか分からない。それから、その平均的な中で、本当に富山の人が大きな家で豊かさを感じて生活しているのか、ライフスタイルを持っているのか分からない。ですから、たとえば黒部で「YKKの社員は全部200坪の家に住みなさい」と、そうすれば田園調布のようにできないわけではないと思うんです。街づくりをして、新幹線が通れば東京まで2時間で行くんですから。軽井沢にあれだけ立派な別荘ができるのも、近いということと、いろいろなことが整っているということですから。富山の場合には、富山の個性として、家とかライフスタイルとか文化が、これからどういうふうに出て上がっていくのかが見えない。それを作らなきゃいけないんじゃないかと思っています。

先程佐藤先生がおっしゃった、「文化は個人的」とか「文明は個人でできない」というのは、私も全く同感なんですが、両方を求めても両立は難しい。そういう意味で、文化と文明の使い方というか、目標がただ文化って言っちゃうと、人それぞれいろんな文化を思い浮かべちゃうんで、そのいろいろな文化の目標が具体的にイメージできて、そのイメージに合ったことをしていけばいいんです。そのイメージが何なのかというのがセグメントごとにクリアになってほしいなと思います。

**木村** その火葬場がいいですね。

**吉田** 名前は「森の火葬場」といって有名なんです。それでスウェーデンの人達は皆さん死者と対話をしたいので、すぐに燃やしたりせず、なるべく長く置く。だから霊安室がずっとあって、次の日もまた行って、引っ張り出して会えるようにする。最後の最後になったらこれはもうしょうがないということで、火葬する。その間がかなり長いんですが、決して悲しむというんじゃなく、あちらの思想の中でそういうカルチャーが生まれたんだと思うんですが。

**木村** 記憶するということですね。アメリカの共同墓地を「メモリアル・パーク」というように、死者を弔うというより、死者を覚えているため、忘れないための墓地ですね。ですから墓石にもカラーの鮮やかな写真を飾ります。

**吉田** 火葬場というのは、死んだ人達との関係をもっといい感じにする場が欲しいですよ。マンションみたいな引き出しみたいところへ入れられるのは嫌だし。

その時は「何しに行くんだ」と言われたんだけど、結構面白かったです。非常にいいものを感じたんで、世界の墓地というか、そういうのを全部見て歩こうかなと思っています。

**金田** お墓で二つ面白いお話をさせていただきます。一つは、ヨーロッパは火葬しませんから、埋めますよね。そうすると何十年か経つと上にまた埋めるんです。結局街中の古いお墓は、骨がいっぱい入って、どんどんお墓のところの土が高くなるんです。

それから私が面白かったのは、北アメリカでイギリス人が開拓をしたとき、その土地割りの計画を作りながらいくんですが、その最初の地図にまず確保してあるのが墓地なんです。これはそのコミュニティを設計する時に、最初にとっておかないと、後で嫌がられたり、変な配置になったりするんです。だから最初に確保するのが墓地。その次に教会の場所と、その教会の牧師さんの給与に当てる土地、そういったものを計画するんです。最低限確保するのが墓地なので、墓地ばかり書いてある地図というのがありまして、非常に面白いです。

実はそんなに大きくはないけれど、私も富山県の田舎の百姓屋の標準サイズの家は持っています、私は完全にダブルスタンダードで生きております。一つは京都の郊外の、都市的なミニサイズのところで住んでいまして、もう一つは富山に、生まれ育った家そのままあるんですが、「どういう生活であるのか分からない」という吉田さんの表現は、ある意味で正しいんです。つまり、現在の利便性追求、近代化追求の志向性の中で、近代的なマンション住まいのライフスタイルしかイメージがつけられていな

いです。だから、ゆったりした空間の緑や屋敷森に囲まれた空間で生活をするというライフスタイルのイメージを、そこに住んでいる人が描くことができない。つまり、自分の親の世代、祖父母の世代は知っているけれど、今そこに住んでいる人は、新しい現在のライフスタイルとなると、別のところできただけのものしかイメージがわからない、ということがミスマッチの最大の理由だろうと思うんです。ですからその地域にとっての景観、その地域にとってのライフスタイルというものをもっとイメージアップできるような、お互いに他のところを向いているんじゃないかと、地域に向かった関心をお互いに深めるような作業をしないとだめだと思うんです。

私は今年の夏、スペイン・ポルトガルで16～17日間、いろいろと楽しく過ごしましたが、その町や村の生活のスタイルというのは、ローカルな特徴が非常に強く保持されている。ヨーロッパの他の国へ出稼ぎに行っても、そういうローカルなアイデンティティをしっかりと持っているというところがあると思うんです。

日本はヨーロッパ世界に比べ、ライフスタイルという点から言うと、確かに不利な点が二つほどありまして、一つは日本は伝統的な家屋での日本的な伝統の生活スタイルから、椅子・テーブルの世界へとという転換をしてしまったということが大きな点です。道路も一緒に、日本は馬車交通のない時代、徒歩交通からすぐ自動車交通に変わったというところがあり、それで道路状態にも違いがあるんです。

それともう一つ不利なのは、日本は湿度が高いですから、木造建築物の耐用年数が比較的短いというところがあります。ヨーロッパでは、私の知っている大学などでも、あるいは民家でも、大変古い建物を実に大切に使っているんです。もう階段が磨り減って、傾いていてもそのまま。アムステルダムに行ったら、平衡感覚がおかしくなります。まともに真っすぐ建っている建物が少ないくらい。しかしそれでもちゃんとそれを保持している。

ライフスタイルのスタンダードは一つではなく、地域に根差したスタンダードが必要だと思うんです。つまり東京スタンダードで考えた時に、富山県のスタンダードは非常に不都合ばかり生じてきて、不利な部分ばかり浮かび上がるわけです。そうではなく、

その土地に根差したその環境と景観が、実は最も有利なところを反映しているわけですから、それを大事にし、あるいはその景観をどう考えるかとか、その中で居心地よく生活するためにどうするのかということが、ちゃんと人々の認識の中に入ることが大事なので、ちょっと一元化した価値観が優先しすぎているというのが、そういうギャップの中にあるんだと常々思っております。

**木村** 仏間のお灯明に火をつけると死んだ人の魂が帰ってくると言いますし、お線香に火を付けるといい香りに誘われて、位牌に魂がよる。蠟燭の光だと光が瞬いて、位牌に書いた戒名がちょっと揺れて見えて、本当にそこに魂がきたように見えるんですよね。そこでお経を唱えると、死んだ人と生きている人がお互い交流し、結ばれ合う。そう思うと、仏間は非常に豊かな人間的空間です。先祖と一緒にいるという心の癒しの場で、仏間にじっとしていると、ホッとして安心できる。そういう感性空間を掘り起こす必要があると思います。

**金田** 私は富山の家には仏壇があるんですが、今住んでいる京都の家には、実は母親が亡くなって初めて仏壇を買ったんですが、仏壇を置くスペースがない。また改造しないといけないという情けない話なんですけど、つまりライフスタイルの中にそういうものが組み込まれたスタンダードができていないんです。

**吉田** 逆に言うと、古い富山のそれらのお話は次の世代、その次の世代に本当に継ぎ続けるのかというと、ちょっと分からないですね。

**木村** 大丈夫ですよ、「冬のソナタ」があれだけ流行ったんですから。非常に古風な純愛物語なんですけど、あれがうけているんです。

**吉田** そういえばどなたからも「冬のソナタ」の話が出なかったんだけど、本当は大事ですよ。あれだけの映像で、あるいはドラマで、あれだけ火が付く、旅そのものもしたくなる気持ちを起こさせるというのは、すごい事だと思います。

実は黒部でも、黒部というのはすぐ山を連想されるものだから、海があるということを知らしめるには映画がいいと、「釣りバカ日誌」を誘致してきたんです。それはそれなりによかったですけど、あとで「冬ソナ」を見て、あそこまでは爆発的にはならなかったな、と。

**佐藤** 「冬のソナタ」のあの火の付き方というのは、説明しがたいものがありますよね。

**吉田** 偶然かもしれませんが、後で説明されると、「なるほど」という理由があるんです。忘れていた純愛物語に対するものや、美しい映像の作り方や、音楽、その音楽も決してアップテンポじゃない懐かしい音楽、そういうものがタイミングよくはまったんですよね。

**佐藤** 逆に言うと、今、純愛がそれだけないのかも。ないから憧れちゃうわけでしょう。

**木村** 今不安な話ばかりでしょう。テロが危ないだの、年金が危ないだの、あんまり「危ない、危ない」と言われると、安心が無性に欲しくなる。安心の砦というのはもう愛情しかないんじゃないでしょうか。それでぐっときたんだと思いますよ。

**吉田** でも、あれだけの人数しか出演しない番組で、親子の関係がきちっとしていて、その葛藤がちゃんと描かれていて、どこか日本人も昔感じていたなと思う内容ですが、映像が綺麗でファッションナブル、というところが非常にうまいんで、富山をベースにあんなドラマを作れたらいいなと思うんです。

**木村** そうですね。韓国はラーメンの商業チャルが違うといえますね。日本だと、兄弟が一つのラーメンをおいしいと取り合いになる。ところが韓国の方は「これおいしいからお前から食べよ」と言っていて、兄さんが弟に譲る。

**佐藤** 日本もそういう時代があったんですけどね。

木村 弟も「兄さんからどうぞ」って、その譲り合うというのが、これがおいしさを表しているわけです。日本の絶叫型のコマーシャルよりいいと思います。看板も同じだと思うんです。

金田 小さな看板とか目立たない看板というのは、意味があるんです。大きく目立つようにはばかり、看板だけを立てる、ということをするからそちらに流れるんですが、イギリスなどには、小さな看板が道路沿いに時々点々とある。それには、観光地や文化遺産などが書いてあって、「この色のこの看板はそれだ」と言うんです。近付かないと全然読めないんですが、それがあるとすぐわかってしまう。だから大きさじゃなく、機能がちゃんと果たせて、かつ全体として調和する、そういうことを考える方法はいろいろあると思うんです。

佐藤 これは日本人の長所でもあり、長所と短所は表裏一体ですが、日本人というのは割とあっさり新しいものに飛びつくじゃないですか。そして絶対にこれじゃなきゃ、というのではなく、興味津々で、いろいろと試してみる。それは、今の食文化にも現れているように、家庭で日本料理だけ作っているというところはまず考えられないですよね。

今ちゃんとお料理のできる主婦というのは、カレーは作れなきゃいけない、ちょっとした中華も作れなきゃいけない、洋食も、フレンチだろうがイタリアンだろうが作れなきゃいけない。そしてもちろん日本食も、生まれた土地のものだけじゃなくて、全国的なものもある程度作れなきゃ、料理ができるとはいえない。

ところがどの国に行っても、家庭で自分の国以外の料理を作る国というのはほとんどないです。そういうのはレストランへ行って食べるものだ、という発想があって、家庭の味というのは、トスカナ地方ならトスカナの料理、ローマならローマから南の味というふうに、自分の国の、それも自分の土地の料理しか作らない。それで「日本料理？好きよ。だけど自分の家で作るなんて考えられないわ」という人が多い。

だからこそ、アメリカの巨大看板の文化をすぐ取り入れて、そこから今足を洗えないでいるわけです。

だから日本人というのは、古いものをさっさと脱ぎ捨てて新しいものを取り入れて、それがだめならまた違うもの、というやり方なので、ちょっと足元をすくわれかねないということになりますよね。

木村 何が日本料理が分からなくなったんですよね。

吉田 富山の食文化ってご存知ですか。私は意外と外で食べるけど、家庭で食べたことないんで、実は分からないんですが。

佐藤 私もそう言われればそうです。特産物は知っていても。

吉田 捕れる魚がおいしいのは知っているけれど、それを家庭料理として食べたことがない。だからちょっとわからないんですよ。

金田 私は福野に生まれ育って、私の母は福光からお嫁に来たんですが、祖母がいましたので、自分の家の料理と、母が自分の実家で習ってきた料理というのを知っていました。数は少ないですが、これは母の実家の料理で、これは家の昔からの味だと。

吉田 それは幸せなケースですよ。レストランで出してくれる、富山料理と称しているものは知っているけれど、本当に富山の人が食べている文化って何だろうかというのが意外と分からなくて。

金田 家によって、その家の料理を固守する家と、そうじゃなく、誰かが入ってくると、その口になっちゃうという、両方がありますよね。

木村 富山の、これから伸ばしていくべき美しいところというところと何でしょう。食べ物でも、景観でも、YKKの技術でも、何でもいいんですが。

金田 たとえば食べ物の話をさせていただきますと、私はこの間スペイン・ポルトガルに

行っていたんですが、大変素晴らしい国だと思ったのは、16~7日間、ホテルの朝食は別にすると、地元の料理しか食べなかったのに、それ以外のものを食べようという気が一度も起きなかったんです。それほどおいしかった。これがアメリカになんか行ったら、もう大変なことになって、今日は日本料理、今日は中華ということになっちゃうでしょう。それほど素晴らしかったんです。たとえば富山県に帰って来て、是非食べたい料理というのがいくつかあるわけです。たとえば私は大好きな昆布〆とか、かぶら寿司とかいうのは帰ったら必ず食べたい。そういうものがあるということは大変素晴らしい。それに近い料理が他県にあっても、富山県にあるようなものは他にはない、というものがありますので、そういうものはイメージそのものも大切にしたら、いろんな形でうけると思うんです。

たとえば、駅弁でますの寿司が全国区になりましたが、あれもおそらくイメージを大切にしながらやってきたんだと思うんですが、そういうことは他にもあると思うんです。そういった、何回食べてもまた食べたいというものがあるんです。それは大変素晴らしいことだと思いますね。

**吉田** 材料はあるんですが、食文化そのものがもうちょっと発展すると、非常に面白いものになるんじゃないかなと思うんです。素材は、海には面白いものがたくさんあるし、山菜もおいしいと思うんです。だから、実は私は他県の人を富山へ連れて来る時には、「うまいものを食べさせるから」と言って連れて来るんですが、来ちゃうとみんな大変喜んでくれる。ところがそういうニンジンをぶら下げないとちょっと躊躇する人もいます。

**佐藤** なんで躊躇するんですか？

**吉田** 遠いと思っているんです。特に黒部というと、黒四ダムとか黒部峡谷のイメージがあって、どんな山の中へ行くのか、と思うようで、招待すると、こちらはタウンシューズ、タウンウェアなのに、ものすごい格好をして来る。それでさっきの、海をイメージ付けようという映画の話にもなるんですが、どうも富山はどのようなイメージなのか

というのがちょっと極端にぶれているんです。だから、「おいしい魚があるよ」というのが定番で使える、誘う時の材料になるかなと思っているんです。

**金田** 残念なことに、本当においしい素材があると、あまり加工が発達しないんですよ。

**吉田** あとは、温泉を一つの誘い水に使いたい。ところがその温泉も、昔のスタイルのままですから。今は、九州で言うと湯布院のような温泉地が大変脚光を浴びている。それに対して別府温泉もがんばっているのもわかるんだけど。宇奈月温泉はどちらかというと後者の温泉地で、使い分けをうまくできるかという、なかなかできない。じゃあどういふふうに変わったらいいかと、今議論をしているんですが。

**佐藤** 温泉のいいところというのは、捜せば日本中あるということですよ。だから、どこの何という温泉宿がいい、というのはいいんですが、その土地その土地という、全国にあるんです。食の方も同様で、これだけ流通が盛んになると、全国においしい魚がないわけじゃないですよ。

**吉田** その中で特徴を出すというのは難しいですよ。

**金田** 富山県の温泉の特徴は、宇奈月を除けばあまり大きな温泉がないということです。小さな、1軒ないし数軒の温泉地がいくつもあるという富山県の特徴から言えば、温泉と自然の関係とか、あるいはその街や村落の景観とか、プラスアルファの付加価値というのは非常に大事で、温泉単独で考えるというだけでは、なかなか難しいと思うんです。

**吉田** 事業経営をする立場とすれば、やっぱり人なんです。実は、会社としても戦略的にどうやってリーダーを育成するかというような議論を、かなりいろんな人達としているんですが、結局はいい素材、いい人材を入れるのが一番いいという



話になってしまって、いい人材を入れるというところから考えなきゃいけない。YKKでも大卒を200人採用するところに10,000人応募してきて、それをインタビューしながら採るんですが、採用しても富山県とあまり関係なくなっちゃう。

富山県は確かに教育県と言っているんですが、非常に皮肉っぽく言えば、進学県ではあるけれど、世界から富山に人が集まって、という教育機関があるかという疑問で、やろうと思えばまだいくらでもやれる。富山県だけじゃなくて、北陸全体で押し上げていけばいいんじゃないかと思うんですが、そう考えると教育問題をどうするかということは非常に重要だし、そこに富山県が、あるいは富山県民がみんな力を入れているんだということが、10年後、20年後分かるようになってくれば、非常にいいと思うんです。

佐藤

富山県のネックは隣に石川県があって、やっぱり金沢のほうがどうしても加賀百万石として、伝統・歴史があるじゃないですか。文化とか文明という、近いだけにとても難しいと思うんです。

吉田

僕は、富山と石川が対立しなくてもいいと思っています。たとえば「湖水地方」と言ったら、別にどこの街かは分からないんで、それと同じように、「北陸」という言葉がいいかどうかは分からないけど、もうちょっと新しい打ち出し方があっていいんじゃないかなと思うんです。

金田

教育という話になると、その渦中にいるんですが、今、教育を取り巻く環境は非常に大きく変わりつつあり、重要なターニングポイントに我々は立たされていると思うんです。単に国立大学の法人化というレベルを超えた話ですが、今の話の中で、いくつか思いますのは、中国の台頭というのがありますが、日本全体として見ても、アジアの人材育成と、その中で日本のウエイトをどのように考えていくか、どのように作り上げていくかというのが非常に重要なポイントになってきている。

たとえば中国を対象を限りますと、今までは中国

から日本に来る学生というのは、はっきり言って二流か三流でした。一流はみんなアメリカか、ヨーロッパに行っちゃう。しかし今、そのトレンドが変わってきてまして、アメリカ側が留学生に対する入国規制をちょっと強めたということもあるんですが、そういう意味ではいい学生を教育できる可能性が外的条件として出てきたというのが一つあります。

それから日本の中での教育で、大学生、高校生という若年人口が少なくなっているという状況があります。それと一方でグローバル展開している企業とか、日本経済そのもののグローバル化の中での人材育成の必要性とか、そういったものが一緒くたになって、大きなターニングポイントに来ていると思います。そういうことを考えると、いろんな可能性を早急に検討することが必要だろうなと思います。

吉田

私は学歴重視ではないんですが、最近はビジネスの世界、特に国際ビジネスの世界を見ると、ビジネススクールを出ていないと、大学だけじゃだめなんです。修士・博士を持っていないと、対等に話ができないような雰囲気になってきている。たまたま私はケログでマーケティングをやっていたんですが、そういう分野では一応トップレベルの学校なんで、評価してくれるんですが、非常に変わってきました。ですから大学のレベルの話じゃなくて、その上のレベルでスペシャリストとしてどれだけのことをやってきたかという話になるんです。これから、そこにどうウエイトを置いて考えるのか。それがたとえば企業側がどういう人を採用するのかという問題にもかかってくるんです。企業としても、これからの国際社会で活躍するリーダーシップをとる人間を、かなり早く作り上げていかなきゃならない。たとえばそれは中国だったらどうするか。私どもの会社も中国で今ワーカーを入れて5,000人採用しているんです。したがって、その中国をさらに大きくしていくために、中国人のリーダーをどう育成するか。リーダーを育成するということは、日本人のリーダーがきちっと育成されていなくちゃならないし、ある意味では管理する、一緒に仕事をするということにならなければならない。どっちが上、下とかは関係ないんだけど、そうなってくると、日本人の連がしっかりしていないと成り立たない。

金田 ご指摘のように、今は大学院の教育に比重が急速に移っていますし、専門職大学院というものがたくさんできつつあるし、私のところでも計画しています。また、我々の方も、実際に海外の研究所の拠点をいっぱい作っているんです。ところが、教育のための拠点やネットワーク形成というのは非常に遅れていまして、それを今急速に進める努力をしております。こちらの大学院生も送り込んで、現地で教育をするようなシステムで、積極的にネットワークづくりをしようと思っています。こういうことは欧米の主要大学であればもうほとんど全部やっているわけですが、ちょっと遅まきながらやろうという段階です。おそらく、企業の方がその先を行って、実際にご苦労をされていると思います。

吉田 大学もお金がないですから。私は慶應大の評議員もやっているんですが、話しているとやっぱりお金がないんです。私学の中では結構やっていると思うんですが、もっとできないだろうかと言っても、できる範囲がある。ハーバードなんかになると、資産が2兆円ぐらいありますから、利息だけでもかなりのことができるので、そういう状態の中での、ある意味では学校間の競争ですよ。

金田 長年かけて、OBの組織化、協力体制の世界的なネットワークを作っているところで、一番すごいのがMITですね。そのための苦労もしているんですが、大変なネットワークです。

佐藤 気付くのがちょっと遅過ぎたんでしょうね。

吉田 そういう中で富山県はどうするのか。

金田 たとえば国が留学生を10万人にするという計画がありますが、根本的な問題の一つは、それを教育機関ではなく、在外公館がセレクトしているということです。これは大きなギャップになっています。運営面もそうですが、もっと抜本的に考える必要があるんです。たとえば富山県に本拠をおいておられるYKKが実際の必要性で展開

しておられる部分に、少しオープンなシステムを加えて、いろんな形で教育機関と連携をとっていただくというようなことがあれば、非常に大きな突破口になるんじゃないかと思います。

木村 中国に日本の寄付講義を買ってもらったらいんじゃないですか。中国からお金を出してもらって、それで中国文化論なり、中国人にとっての経営論なりを、日本の大学で講義してもらおう。5年間なら5年間だけ特別の中国人の教授。

金田 現時点で、教育という観点からは極めて難しいですね。たとえば私どものところに附置研究所で原子力実験所というのがあります。これが日本で唯一の実践的原子力教育をやっているわけですが、日本中の大学とネットワークを作っていて、それに今韓国も全面的に加盟していまして、韓国の有力大学がほとんど加盟しています。今度、中国がこれから10年ぐらいの間に数十機というレベルの原子力発電所の計画を立てているんですが、これが本当に安全に運転できるかどうかというのは大変大きな問題です。そこで万一事故があると、日本もまともに被害を受けますから。ところが、中国から原子力教育をしてほしいという要請がくるんですが、お金はこっちがもってくれて言うんです。中国と韓国は全然その姿勢が違うんです。ですからその突破口を開くのは非常に難しいです。

木村 ファイザー製薬が東大でやっていますよね。お金は全部ファイザー製薬が出す。

金田 そうというのは簡単なんです、中国の場合は今非常に難しいです。他にそういう先生がおっしゃるようなケースはいっぱいあります。

木村 とにかく外国の人の目で富山県を見てもらうというのが大事なことです。どこが利点で、どこが欠点か、僕らには分からないことがあります。

スイスの時計メーカーで、えらく日本を気に入っている社長がいて、その人は鳥居の赤がいいって言ってます。赤というと普通、革命とか情熱と言われ

るけど、鳥居の赤は安心の赤だって言うんで、自分の作っている女性用の腕時計に鳥居の赤の色を使っているんです。

向こうの目から見ると、いいなと思うことはいろいろあると思うんです。特に中国人の観光客にとって、日本に来ると感動するのは、食材が、肉でも野菜でも新しいということ。これは富山県の売りですよ。

温泉は、小さいほどいいって言うんですよね。大きいのは不自然だ、あんな大きな湯船あるわけない、どこかごまかしているんじゃないかって。

**吉田** 3週間前にトルコのイスタンブールに行ったんですが、イスラムの世界で、アラーの神が一番大事にしているのは清潔、勤勉、我慢強さ…。

**佐藤** 日本人とあんまり変わらないですね。

**吉田** それを一番具現化しているのは日本人だと。イスラム教徒にしてみると、日本人というのは、いわば最も理想の形を作り上げている。もしかするとイスラム教になるんじゃないかというぐらいに考えたらいいんですよ。

**木村** 本当によく似ているところがあるんですよ。アラーは光でしょう。日本も、波間にキラキラ光っている日の光がご神体で、だから日本のテレビのドキュメンタリーで最初とか最後に必ず朝日や夕日がキラキラ光っているのを出しますよね。

**吉田** 清潔はいいんだけど、日本の風呂だけはいただけないと言うんですよ。なぜあんな人の入ったところへ入るんだと。彼等の清潔観からすると、溜めているところにまた入るというのはできないと言うんです。

**木村** 温泉はいいんですか？

**吉田** 温泉もだめなんです。温泉をちゃんと知らないんで、きちっと説明していけば、なんと清潔ないいものが、ということになるんでしょ

うけど、そこを一步間違えると、世界の中でイスラム教を不思議に思うという人達もいるんです。こういうこともつい3週間前は分からなかったですが。世俗主義と言われるトルコのイスラム教は結構近代社会のいいところ、特に日本を模範にしていますから。そのトルコを模範にしているのがその周辺のイスラムの西アジア諸国で、だからだんだん親日国が増えていくと思うんです。これは非常にいいことですよね。

ただ、宗教というものをもう一度取り上げるべきなのかどうか。

**木村** 北陸三県はなにしろ日本で一番信仰深いところですから。

**吉田** それが色濃く残っているところだから、新しい時代にそれをどういう形に取り替えていくのかですね。

**金田** 難しいですよ。最近比叡山延暦寺が、世界宗教者平和会議というのをやっていますし、今度まもなく高野山が大きな宗教の集まりをしようとしています。そういった宗教的なものが動く一方で、「京都文化会議」というのを京都大学と京都府と京セラの稲盛財団で昨年からはじめています。「こころの文化」ということを基本テーマに議論をして日本から発信しよう、ということでやっているんですが、非常に取り扱いが難しいです。もちろん文化の多様性を認めるということは大前提なんですけど、多様にあるということと認めるとそれで終わりになっちゃうんです。そういう個別性と普遍性とか、いつも議論を積み重ねるわりにはなかなか先に進まない。たとえば日本の「心」という単語一つをとっても、それを英語に訳そうとすると、どうも訳せない。今のところは「心 - human mind」と一応言っていますが、最終的には「心」を世界的に説明しないとしょうがないという話にはなっているんです。非常に難しいです。

**佐藤** 説明すると、一つの思想論になっちゃういますね。

吉田 でも、何かしなくちゃいけない。

金田 特に富山県で意味があるのは、生活と結びついた活動ですね。

吉田 若い人も自然に感じているんじゃないですか。

木村 いろいろ社会活動をしていて、視野が広いですね。

吉田 DNAの中に何かあるような気がするんですが、それを引っ張り出さなきゃいけないんじゃないですか。非常に真面目だし。県知事が、一番の模範かもしれないですね。

木村 知事さん、一言いかがですか。

中沖 素晴らしいお話をたくさんお聞かせいただきまして、ありがとうございました。目がぱっと一度に開いたような感じです。

実はこの間の県議会で挨拶を申し上げましたが、そこで富山県民の力ということと、富山県の夢を見る、という点について私なりに申し上げました。

県民の力という点については、富山県民は昔から立山を毎日見て、いろいろとがんばってきたと思いますし、いろいろな事業もやってきたと思いますが、ではこれからいったいどうなるんだろうかということです。非常に厳しく、先行き不安な現代においては、もっとみんなが心構えをしっかりとって、いかなる事態になっても対応できるような人間に育つ必要があるということをもっと感じております。そしてそのためには、富山県民はもっと広い度量や心の豊かさをもって臨むことが非常に大事ではないか、これが富山県民の一番大きな問題点の一つだと思っております。

もう一つは富山県の夢という問題ですが、富山県はちょうど日本の真ん中であって、これからは中国などを相手にして発展していかなければなりません。富山県民は昔、売薬などで稼いだわけですが、そういうものを基にして、県民はもっと、日本海を通じて世界に広がる夢を持つべきじゃないかという意見を

を申し上げました。

今日も皆様方のお話を聞きますと、味の問題にしても宗教の問題にしても、また教育の話もありましたが、とにかくいろんなことが富山であるわけで、そういうものをもう少し生かすようなことを考える必要があると感じております。富山県の持ついろいろな力を発揮して、未来に向かって、がんばっていくということが大事ではないかと思っております。これからもいろいろとご指導いただきますとありがたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

私個人の勝手な意見を申し上げましたが、もっと人間としての豊かさ、深さをもって、富山県民はもっと伸びる必要がある。すると、この富山県は世界に冠たる地域になると思っております。富山県はみんなが力を合わせてがんばっていき、これからまだまだ伸びる県だと、今発展の途上にあるんだという感じさえ持っていますので、これからもよろしくお願ひをしたいと思います。

木村 ありがとうございました。よく今、循環型社会と言いますが、循環ばかりしていたら進歩がない。レールの上を機関車が走るとき、車輪は同じところで回っているんじゃないで、前に進んでいく。歴史とか文化に基づいて、一見ぐるぐる回っているみたいだけど、しかし前に進んでいく。そういう社会が富山県じゃないかと思っております。さっきおっしゃった薬売りなどは、見事なコミュニケーション感覚があったわけですから、それをもう一度発揮するいいチャンスが今来つつあるんじゃないかと思っております。

佐藤 歴史の中で富山の方々というのは、全国薬を売り歩いていらっしゃるじゃないですか。あの間に、いろんなところの情報を得たり、見聞を広めたりする。それが今の富山県人の土台にもなっている。本当に夢は大きく広げられると思えますね。

中沖 どうも今日は本当にありがとうございました。

# 「立山倶楽部」 会議テーマ

	実施時期	実施場所	テ　ー　マ
第1回	平成6年6月18・19日	立山高原ホテル	とやまから21世紀
	木村尚三郎、伊勢彦信、大浦 溥、黒木靖夫、今野由梨、鈴木忠志 佃 一輝、山本卓眞		
第2回	平成7年7月25・26日	宇奈月国際会館	とやまから21世紀 ～とやまから世界へ～
	木村尚三郎、伊勢彦信、大河原愛子、楠田 實、高坂正堯、今野由梨 東郷茂彦、中條高德、山本卓眞		
第3回	平成8年10月3・4日	立山高原ホテル	とやまから21世紀 ～ゆとりと豊かさの質を問う～
	木村尚三郎、伊勢彦信、今野由梨、丸田頼一、森下慶子、山本卓眞 湯川れい子、吉岡 明、吉田光男		
第4回	平成9年10月1・2日	立山高原ホテル	とやまから21世紀 ～文化と交流の時代へ～
	木村尚三郎、青木 保、猪口 孝、北本正孟、福原義春、松岡正剛 丸山茂徳、森 洋子		
第5回	平成10年10月6日	宇奈月国際会館	とやまから21世紀 ～そうだ、とやまへ行こう～
	木村尚三郎、島森路子、福原義春、丸山茂徳、涌井雅之		
第6回	平成11年11月18日	富山国際会議場	とやまから21世紀 ～21世紀の女性そしてとやま～
	木村尚三郎、赤井士郎、岡本真佐子、佐伯順子、野村乙美、宮下孝晴		
第7回	平成13年10月11日	黒部市国際文化センター	21世紀のとやま像 ～住んでよし、訪れてよしの富山県づくり～
	木村尚三郎、石鍋 裕、白石真澄、深井晃子、吉田忠裕		
第8回	平成14年10月15日	富山全日空ホテル	富山を世界の舞台に
	木村尚三郎、片倉もとこ、セーラ・マリ・カミングス、谷口 侑、野村万之丞		
第9回	平成15年10月14日	富山全日空ホテル	これからの富山県 これからの人材育成
	木村尚三郎、數土文夫、戸田奈津子、マリ・クリスティーヌ、望月照彦		
第10回	平成16年9月29日	富山全日空ホテル	とやまの文化力を高める
	木村尚三郎、金田章裕、佐藤陽子、吉田忠裕		

財団法人 富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山県千歳町1-5-1(富山県教育記念館2階)  
TEL.076-444-2000/FAX.076-444-2001